

## 論文の内容の要旨

論文題目                    スペイン植民地支配末期のテキサス境界社会（1790～1810年）  
                                  ——ルイジアナ住民受入政策を中心に

氏名                         二瓶 マリ子

本論文が対象とする1790～1810年はアメリカ独立戦争(1775～1783年)の直後であり、スペイン植民地支配末期にあたる。ルイジアナ購入（1803年）によりスペイン領テキサスがアメリカと境を接するようになると、スペインとアメリカの間には境界線画定問題が浮上し、スペインはテキサス東部の安全保障に対する憂慮を深めた。この緊張は1806年のルイジアナ中立地協定で一時的に和らぐものの、1808年にはスペイン独立戦争、1810年にはメキシコ独立戦争が勃発し、テキサスを取り巻く国際環境は緊張を増した。

メキシコがスペインから独立（1821年）すると、テキサスは南のコアウイラ州とともにメキシコの1州となったが、アメリカ人入植者が多く、彼らは現地人と結んで独立革命を起こし、テキサス共和国として独立した（1836年）。その後、アメリカはこの共和国を併合（1845年）し、これをきっかけに米墨戦争（1846～1848年）が勃発した。

この1836年のテキサス独立の動きに加わった住民はどのような人びとであったのか。実はこの点については数ある先行研究の中で、これまであまり検討されてこなかった。なぜならば、メキシコ独立戦争勃発からテキサス独立に至るまでの時期（1810～1836年）、住民を把握するような行政機構は存在せず、人口調査をはじめ、住民ひとりひとりのプロフィール（性格・特徴）やライフヒストリーについて、細かい情報が得られる行政文書は残っていないからである。ところが、スペイン植民地時代末期には、スペインの植民地官僚機構が健在であり、住民をこの時代としては驚く程緻密に把握しており、大量の文書記録を作成していた。その文書記録は、現在ベア・アーカイヴスとしてテキサス大学に所蔵されている。

このベア・アーカイヴスの文書によって、我々はスペイン植民地時代末期のテキサス、特にその東部の住民についてのプロフィールとライフヒストリーを細かく知ることができ

る。その情報量は 1810～1836 年とは比較にならないほど多い。よってこれを検討することが、メキシコ支配下のテキサス住民について窺い知るための間接的・有効な研究方法と言える。

本論文の目的は、スペイン植民地時代末期におけるテキサス東部の西部とは異なった地域性・多様性、そしてルイジアナとの間の浸透性 permeability をアメリカ合衆国独立、ルイジアナ購入と進んでいく時系列に沿って分析することである。その際特に、テキサスの人口増加を目的としたルイジアナ住民受入政策（1803～1810 年）に焦点を当てる。

ここで注意すべきは、ルイジアナとの間に浸透性があるこのような状況は、テキサスの行政の裁量権を持つ内陸諸地方総司令官府（在チワワ）にとって望ましくない、むしろ慨嘆すべき状態であったということである。そのような立場と意識から作成された史料に基づいて、テキサス東部境界社会の歴史を叙述するにあたっては、史料批判に細心の注意を必要とする。治安の悪さ、無法状態など、敵意をもって誇張されて書かれていることもあり、また反面、実情糊塗のために実際よりも良く描かれることもあるであろう。しかし我々はテキサス東部住民自身の作成した史料をほとんど持っていない。そのため、植民地官僚たちの言説の中にいわば陰画として浮かび上がる住民たちの姿を細心の注意を払って見て取る努力をするしかないのである。

本論文は終章を含め 7 章で構成される。

第 1 章ではスペイン植民地支配テキサスを概観することを目的とし、その地理、統治体制、人口、スペイン支配下にはないインディオについて描出した。そして当時のテキサスは人口が極めて少なく、僻遠の地特有の「貧しさ」という問題を抱え、テキサス総督府もその住民も、人口増加という共通の課題を持っていた点を確認した。

第 2 章では、レビジャヒヘッド人口調査（1793 年）を主たる史料として、テキサス西部サン・アントニオ、東部ナコドーチス、係争地域バイユー・ピエールの人口学的・社会経済的特性と、それらの地域間の差異・多様性を検討した。西部は、コアウイラなど内地との紐帯が強く、ルイジアナとの浸透性がほとんどない安定した社会であり、境界社会と特徴づけることはできなかった。これに対して東部は、すでに 1793 年の時点でルイジアナ出身者が人口の 1/5 を占め、また人口の 1/10 は非スペイン臣民であるなど、東のルイジアナに向けて開かれた浸透性の高い地域であった。係争地域バイユー・ピエールは、ナコドーチスよりもさらにルイジアナや非スペイン領への浸透性が高く、住民の約 70% はルイジアナ、カナダ、ヨーロッパ諸国出身であった。以上のことから本章では、社会の浸透性が西部よりも高いテキサス東部と係争地域を境界社会として位置づけた。

第 3 章では 1790～1801 年にかけてフィリップ・ノーランが行ったテキサス東部—ルイジアナ間の馬交易を検討した。大規模な武装隊商を率いてテキサス東部の奥地に分け入り、インディオ相手に馬を買い付けるのが彼の経済活動であった。ノーラン率いる武装隊商は

スペインが安全保障上の危険を感じるほど大規模なものであり、スペイン植民地当局がテキサスの高度な浸透性に危機感を抱き、自己完結性を高める企てを起こすきっかけとなった。さらにノーランの活動は、テキサス東部とルイジアナとをまたにかけて一攫千金を狙って活動していた当時の住民の様相を細かく明らかにできるほとんど唯一の個人であった。

第4章では、1803～1810年のテキサスを取り巻く国際環境と、ルイジアナ住民受入政策の策定および施行の過程を検討した。それに際して、この時代を第I期（1803～1804年）、第II期（1805～1807年）、第III期（1808～1810年）の3つに区分した。第I期はルイジアナ購入前後にあたり、スペイン植民地当局にとって境界線画定が最大の懸念事項であった。この間テキサス総督は、人口増加政策として、フランス領（後にアメリカ領）となる予定であったルイジアナから住民をテキサスに受け入れよう、とチワワの内陸諸地方総司令官府に提案した。チワワのネメシオ・サルセド総司令官はこれを認めたが、テキサスの安全保障をより重視したため、ルイジアナ住民の入国・受入の可否を決める審査は彼自身がチワワで行うことを決定した。その結果、ベア・アーカイヴスにはこの時代のテキサスへの移住申請者に関わる多数の書類が残されることとなった。この政策が本格的に始動した直後から、ルイジアナ住民による大規模な集団移住申請が次々となされた。最初の申請は、ベルナルド・マルティン・デスパジエルらが提案した1000家族移住計画（1804年4月）であった。この計画は実現しなかったものの、デスパジエルらが作成した書類はいわばルイジアナ住民受入政策の趣意書の役目をするものとして興味深い。第II期は、スペインとアメリカとの間でルイジアナ中立地協定が結ばれ、2国間の緊張が一時的に和らいだ。この時期は、ブロヘ・デ・クロウエの大規模なルイジアナ住民移住計画が提案されたが、これはそのままの形では実現せず、その代りにテキサス中部にはトリニダ・デ・サルセドという新しい町が建てられた。同時に、サン・ベルナルド湾にも港を建設するという計画が提案されたが実現しなかった。第III期に入るとテキサスはスペイン本国の後ろ盾を失い、チワワの総司令官府はいよいよテキサス東部についての憂慮を深めた。1809年2月、総司令官府はルイジアナ住民受入政策の中止を決定し、人口増加を望んでいたテキサス総督府の官僚4人との間にはひどい軋轢が生じた。テキサス総督府は、本国の最高中央評議会に対してチワワの政策は間違っている、として1809年9月に直訴した。これは中央政府からの命令にテキサス地方政府が屈せず、テキサスの独自性を貫くという姿勢であり、中央からテキサスが離脱する動きを示唆する萌芽的状况であった。

第5章では、ベア・アーカイヴスに収められている個別の移住申請者77人のプロフィールを統計処理し、人口学的・社会経済的分析を加えた後で、申請者の特徴や意図、彼らに対するスペイン植民地当局の対応、そしてテキサスの地域的多様性と1803年以降の変化を検討した。ルイジアナ購入以降、テキサスの状況は劇的に変化した。ルイジアナからの移住申請者たちは約20%の非スペイン臣民を含み、出身地は10人のうち3人がルイジアナ以外のスペイン領、1人がアメリカ合衆国、1人がルイジアナ、残る半数はカナダやヨーロッパ諸国であり、約半数が非牧畜業従事者という、もともとのテキサスの住民とはかなり

異なった人びとであった。彼らの中にはテキサス東部境界社会の混乱と治安の悪化を嫌い、テキサス西部に移住した者もあったが、テキサス東部に留まりルイジアナとの間で密輸をするなど、違法行為を働く者もあった。彼らは、厳格なルイジアナ住民受入審査体制を逆手にとって、申請書類の控えを旅券か身分証明書のように使用し、移住許可が出ても実際には指定された土地に移住せず不法行為に従事していたようだ。1803年を境として、テキサス中東部のルイジアナへの浸透性は飛躍的に高まったのである。

第6章では、1804～1810年にテキサス中東部で作成された人口調査関連の5つの史料を1793年レビジャヒヘド人口調査と比較・検討した上で、中部・東部・係争地域という3つの地域の人口学的・社会経済的特性を明らかにした。結果、それぞれの地域の住民の出身地や非スペイン臣民率、独身率からは、3地域の社会の浸透性の高さが明らかになった。ただし、係争地域では、浸透性は確かに高いが、その一方で高齢の子育て世帯が多く、世帯規模も他地域と比べて最も大きく、安定性が非常に高いという例外的な特徴が見られた。この理由は推測するしかないが、彼らの多くは若いころアメリカ独立戦争やハイチ革命などの政治的動乱に巻き込まれて家庭を営むことができなかった。そういう人びとがこの地域に移住してきて乱されたライフサイクルを挽回しようとした結果、比較的高齢で多くの子どもをもうけたものと思われる。

終章では、メキシコ独立戦争期テキサスで発生した2つの反乱を検討した。これらの反乱と同時にインディオの襲撃が頻発した結果、1813年以降テキサス東部の住民はルイジアナに避難し、テキサス総督府の機能も麻痺した。1821年にメキシコが独立を達成しオースティンが入植計画を立ち上げると、テキサスには次々とアメリカ人が流入した。この中には、本論文第4～6章で取り上げた1800年代の移住申請者および東部の住民も含まれていたであろう。ただし、1810年以降テキサス総督府の運営体制は変化したため、1821年以降テキサスに流入した者たちの様相を知ることが可能な緻密な行政文書は残されていない。これらの人びとをうかがい知る上で、本論文第4～6章で扱った人びとの事例は重要である。

ルイジアナ購入以降のテキサス境界社会は、ルイジアナからの移民流入によって非スペイン領への浸透性を著しく高めた。このことは、トリニダ・デ・サルセドなどの新しい町の建設を含めテキサスの社会経済を活性化させたが、また一面、治安の悪化をもたらした。活性化と混乱が同時に進行するテキサス境界社会のダイナミズムは、1810年のメキシコ独立戦争勃発によって突然に中断された。治安の崩壊とインディオの襲撃激化によってテキサスでヨーロッパ系住民が住むのは西部のみとなり、ナコドーチスやトリニダ・デ・サルセドといった中東部で活動していた人びとはアメリカ領ルイジアナに逃れた。やがてメキシコが独立を遂げ、オースティンのもと、1821年にかつてのトリニダ・デ・サルセドよりやや西よりに入植地が設けられたとき、最初にここに入ってきたのは、かつてのテキサス中東部在住者だったと思われる。彼らは結果的にアングロ系アメリカ人の大々的な流入に先鞭をつける結果となったが、植民地時代末期テキサスの境界社会のダイナミズムは、独立後の時代にも継承された、と考えると良いであろう。